

開館 60 年特別展 横山大観と川端龍子

大田区龍子記念館（中央4） 2023.02.11～03.12



「龍子記念館」は、日本画家「川端龍子」(1885～1966)が文化勲章受章と自身の喜寿を祝い自邸前に造り上げた美術館で、本年は開館 60 周年を迎える。

これを記念するものとして、日本画家の重鎮として美術ファンならずとも知る「横山大観」(1868～1958)と「龍子」のドラマチックな交流紹介である。

日本画家としての「龍子」の歩みは、「大観」らが率いる「再興日本美術院（院展）」で、活躍の舞台を得た大正期に始まり、「大観」を師範のように慕い、「大観」も「龍子」に期待をかけて重用した。

本展では、若い日の「大観」の代表作《無我》や《陶靖節》《在る日の太平洋》《神国日本》を、「龍子」は《靈泉由来》や《潮騒》などを展示している。

横山大観 《無我》 1897年 展示期間 02.25～03.12

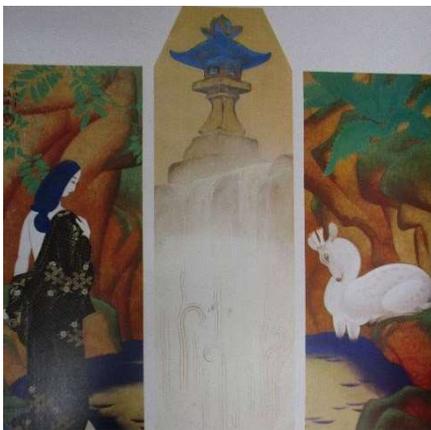


本作は、「大観」の 29 歳時の出世作として有名で、画題が禅的な表現であるが、まるで誕生仏を思わせるような童子が身にあまる広袖衣を着て、大人の草履を履き無心に歩み出そうとする姿であり、視線は遠くはるかを眺めている。

眉のあたりは、やや誇張された愛苦しい表現であるが、これは古巻絵の中から得たもののようと思われる。

これを無心の童子にしているところが、いかにも気鋭の作家らしい卓抜な発想として注目される作品である。

川端龍子 《靈泉由来》 1916年



画伯は、かねてから挿絵の制作で覚えた<目のつけどころ>を生かして、もっと豊かなイメージを形象化して、やや装飾風な誰も行っていない画面を表現しようとした。本作品は、上州鹿澤の野獣と靈泉に絡む伝説であり、これは日本武尊の放った矢で手傷をおった鹿が山陰の温泉で脚の傷口をひたし、鹿を探し求めてたどりついた日本武尊が弓枝に頬を寄せて、それをじっと見つめているというものである。